

奇跡の虹

幸せな猫サスケの贈り物



プロローグ

これは、本当にあった奇跡のお話。

とても幸せな猫と、

その猫を心から愛した女の子のお話。

サスケ

オレの名前は、サスケ。

オス猫、4才。人間が「キジトラ」っていう、縞模様だ。

短い毛だけど、やわらかくてすごくさわり心地がいいって、けいちゃんと言う。

けいちゃんってのは、オレと一緒に暮らしてる人間の女の子だ。

毎日、きれいな水とおいしいカリカリを用意したり、毛皮をブラッシングしてくれたり、トイレをきれいにしてくれたりする。

猫が気持ちいいって感じる場所をよく知ってて、アゴとか耳とかオデコなんかを、ちょうどいい具合になでながら、「サスケは、可愛いねえー」と言う。

それも毎日だ。よく飽きないな。

オレは、そんなけいちゃんに感謝をこめて、マッサージをする。

けいちゃんがソファでゴロ寝をしている時、腹の上に乗って前足でふみふみしてやる。そうすると、けいちゃんは「サスケ、重い...うう」って苦しそうな声を出す。でも、オレをどけようとはしない。だから、重いだの何だの言いながら、オレのふみふみが好きにちがいない。

だって、ふみふみしながら「ニャー」って鳴くと、「サスケええええ！ 可愛いっ！」ってアホのように笑うんだぜ？ オレの声にメロメロなんだ。オレ、体はデカイけどボーイソプラノだからな。

けいちゃんは、毎日毎日、目を細めてオレの名前を呼ぶ。

オレは、ボーイソプラノで返事をする。

けいちゃんが笑っていれば、オレは満足だ。

仲間

そう思ってるのはオレだけじゃない。ここには、オレの他にもたくさんの猫がいて、みんなけいちゃんのが好きだ。

どの猫も、名前の最初に数字がついている。この家に最初に来た猫がナナ先輩で、次がしい先輩だったから、その後は何となく数字にしようってことになったらしい。0のオーちゃんから、9のくうちゃんまで、5番は欠員で合計9匹。

オレの名前を決める時、もう少しでゴンザレスになりそうだったんだが、結局3のサスケに落ち着いた。

...ゴンザって呼ばれなくて、ちょっとホッとしている。

真っ白で青い目の美人、ナナ先輩も拾われてきたらしい。他の猫たちも、みんな拾われたりもらわれてきたりで、いろんな事情がある。だから、今ここで暮らしてるのが夢みたいだ。

オレはあんまりチビだったから、ここへ来る前のことはよく覚えてないけど、気がついたら親も兄弟もいなくて1人ぼっちだった。怖くて心細くて、みーみー鳴いた。

そしたら、ヒゲのおっさんに拾われて、病院てとこに行ったり、おっさんの会社に行ったりしたあと、この家に連れて来られた。

しい先輩は礼儀に厳しくて、猫としてのマナーがなってないと容赦ないパンチが飛んできた。ナナ先輩はチビのオレが騒ぐと、やれやれと言った感じで知らんぷりしてた。

でも、何だかんだで先輩たちはオレの面倒をよく見てくれたし、遊んだりもしてくれた。

そのうち後輩たちも来て、どんどん賑やかになった。

チビだったオレは、いつのまにか9匹の中でいちばんデカくなって、お気に入りのソファの背もたれに乗ると両側がハミ出すぐらいの立派な体になっていた。

オレたちみんな、ヨタヨタのチビだったのが大人猫になれたのは、けいちゃんがいてくれたからだ。

ここは、寒くないし、ご飯もたくさんある。

他の猫たちとも、遊んだり一緒に寝たりして、すごく楽しい。

何より、けいちゃんがいる。

のどをゴロゴロ鳴らして、けいちゃんをふみふみする毎日が、オレは大好きだ。

ずっとずっと、けいちゃんと、他のみんなと、ここで暮らせたらいいな。

――でも、「ずっと」はムリだったんだ。

神さま

ある夜、ぐっすり眠っていたオレは、まぶしい光がさしてくるのを感じて目を覚ました。見ると、光の中心に猫みたいな金色の目でオレを見ている人がいた。着ている服も、髪もヒゲも真っ白で、光に半分溶けているみたいだった。知らないやつだけど、なぜか怖くなかった。

「あんた、誰？」

オレが訊くと、頭の中に響くような声で答えが返ってきた。

「私は、人間が神様と呼んでいるものだよ。」

「その神様が、オレに何の用？」

神様は、金色の目を縁取る白い睫毛を少し伏せて、やさしくこう言った。

「いいかい、サスケ。よくお聞き。とても残念なことだが、もうすぐお前の寿命は尽きる。お前は、病気で死んでしまうんだ。」

人間なら、大騒ぎするのもかもしれない。

でも、オレは猫だから。

猫っていうのは、人間が考えているよりもずっと、命についてたくさんを知っている。

だから、オレは驚きもしないし、悲しんだり怒ったりもしなかった。

だって、生き物なんだから。しかたない。そんなの、生まれた時からちゃんとわかってた。

「そうか。オレ、まだ4才だけど、けいちゃんがいなかったら0歳で死んでただろうし、しょうがないな。でも、ここにいられなくなるのは.....ちょっとイヤだ.....。なあ、神様。オレ、死んだらどこに行くの？ ここよりいいなんてことは、やっぱりないんだろうなあ...」

わかってても、寂しいもんは寂しい。オレは少しだけ、弱音を吐いた。

「一緒に暮らした人間と、深く心を通わせた動物は、虹の橋を渡った向こう側の国に行くんだよ。そこは、ケガや病気の痛みもないし、飢えも寒さもない。とてもよいところだよ。」

「でも神様、そこにけいちゃんはいないんだ！ 仲間もいない...そんなのちつとも、いいとこじゃないよ！」

虹の橋の向こうの話は、けいちゃんにも聞いたことがある。このまえ、けいちゃんの実家のバケツさんが虹の橋を渡って行っちゃったって、けいちゃんがしょんぼりしてた。

オレはけいちゃんそばの傍についてた。いっぱいふみふみしてやった。

猫語はわからないだろうけど、「オレがいるよ。バケツさんがいなくても、オレがけいちゃんといえるよ。」って、ボーイソプラノで言ったんだ。

けいちゃんは、「サスケ、長生きしてね。他のみんなも、長生きするって約束してね。猫又になってもいいからね...」って言った。目に、涙が光ってた。

オレ、本気で猫又になろうって思ってたんだ。

けいちゃんを泣かせたくないから。だから、猫又になるって約束したんだ。

願い

神様は、オレの頭をそっとなでた。

「大丈夫、何も心配しなくていい。お前の大好きな人間も、仲間も、やがて虹の橋を渡ってお前に会いに来る。向こうの国の時間なら、あっという間だ。」

「ほんとに...？」

「ああ、本当だとも。お前たちの心はしっかりと結びついているから、必ず会えるよ。」

「じゃあオレ、いいや。こっちの世界の、この家じゃなくっても、けいちゃんとみんなが一緒ならいい。」

オレは前足で、顔をこすった。

「神様は、オレがもうすぐ虹の橋を渡ることを知らせにきたの？」

「いや、それだけじゃない。お前は、一緒に暮らした人間にも猫にも、それから、この家に来た他の多くの人間にも、たくさんのぬくもりを与えた、とてもよい猫だった。そのごほうびとして、虹の橋を渡る前に、1つだけ願いを叶えてあげよう。」

オレは、神様をじっと見つめた。

「どんなお願いでもいいの？」

「寿命を延ばす、というのはできないよ。命の時間は決まっているからね。」

「ちがうんだ。神様なら、そんなに難しくないと思うけど...この家に、子猫を1匹、よこしてくれないかな。できれば、オスで...とびきり、元気でやんちゃなやつがいい。」

神様は、ちょっと不思議そうな顔をした。

「本当に、その願いでいいのだね？ 広い外を自由に走り回ることも、すごいごちそうをお腹いっぱい食べることもできるんだよ？」

「うん、いいんだ。オレ、この家にチビ猫が来てほしい。そしたら、オレがいなくなっても、けいちゃんが寂しい思いをしなくてすむから。」

後輩のチビたちが来た時、けいちゃんは本当に楽しそうだった。子猫がいたら、きっと賑やかになって、オレがいなくても大丈夫だ。

「わかった。その願いを叶えよう。」

——オレはハッと目を覚ました。いつの間にか、眠っていたらしい。

でも、神様が来たこと、オレに言ったことは夢じゃないって、はっきりとわかった。

ある日

そして、ある日。

けいちゃんは、子猫を拾ってきた。神様は、ちゃんと約束を守ってくれたんだ。

雨にうたれて田んぼで倒れていたチビは、少しの間ぐったりしていたけど、すぐ元気になって大暴れするようになった。オレと同じオス、そして毛皮の色もそっくりだった。神様も気がきいている。

名前は、ゴンザになるんだろうと思っていたら、ゴゴってことになった。

ゴゴは、神様にお願いしたとおり、本当にやんちゃで暴れん坊だった。

けいちゃんは、毎日ゴゴに振り回されて、「こおら！ ゴゴーーー！」と笑ってゴゴを追いかけしていた。

オレの願いは、叶った。

これで大丈夫。

ゴゴが、けいちゃんを笑顔にしてくれる。

——そしてとうとう、その日が来た。

けいちゃんは、オレを医者に見せたりして何とか生かそうとしたけど、人間にどうにかできることじゃなかった。神様が、冷たくなった毛皮からそっとオレを連れ出した時、オレの体は病院の中で、間に合わず駆けつけたけいちゃんはオレの抜け殻を抱きしめて「ごめんね、サスケひとりで逝かせて、ごめんね」って泣いた。

けいちゃんが、オレに謝ることなんて何ひとつないのに。

まだ4才だから、寿命じゃなくて自分のせいだと思ったんだろう。でも、これは神様が決めたことだから、けいちゃんはちっとも悪くない。猫又になるって、けいちゃんとの約束を守れなかったオレの方が、けいちゃんに謝らなくちゃいけないのに。

でも、ゴゴがいるよ。

大丈夫、他のみんなもいる。だから、早くいつもみたいに笑って。

そう思って、オレはけいちゃんの傍にいた。もうけいちゃんには見えなくなっていたけど。

オレの毛皮は、燃やされることになった。

おかげで、オレはその煙と一緒にすんなりと空に上がることができた。

いよいよ、こっちの世界とも、けいちゃんとも、お別れだ。

けいちゃんにさよならを言おうと、下を見下ろした。

そしたら――

けいちゃんが、ものすごく泣いてた。

これまで見たこともないくらい、泣きじゃくっていた。

オレは、びっくりした。

「神様！ 神様！ どうしよう。けいちゃんが泣いてる。オレ、どうしよう！」

ゴゴが来て、猫が10匹になって、オレ1匹がいなくなっても元の9匹になるだけなら、大丈夫だと思ってた。たった1匹の猫がいなくなるだけで、あんなに、世界中の猫が死んだみたいに泣くななんて思わなかったんだ。

奇跡の虹

「神様！ けいちゃんが、あんなに泣いてる。オレのせいなんだ！ 何とかならないの？ ねえ、神様！」

もうないはずのオレの目から、見えないしずくがぼろぼろとこぼれた。

ふんわりとあたたかい感触がして、神様がオレの前足にそっと触れたのがわかった。

「サスケ、お前の願いを1つ、聞いてあげよう。お前は、自分のための願いを言わなかったからね。今度は、お前自身の願いを叶えてやろう。お前は、どうしたい？」

オレは、考えた。オレなりに、精いっぱい。

「神様、オレ、けいちゃんに伝えたい。オレが、すごくすごく幸せだったって。けいちゃんと一緒にいられて、嬉しかったって。...オレの気持ち、伝えられる？」

「ああ、できるとも。」

「それから...1つだけじゃなくなるかもしれないけど...オレが虹の橋の向こうで待ってるって、わかるようにしてほしいんだ。」

「叶えてあげよう。それは、虹の橋を渡った全ての生き物の願いだから。」

ふっ、と神様の手がオレの前足を離れた。

次の瞬間、大きな虹が、空にかかった。

そして、その内側に、もう1つ。神様は、空に二重の虹を架けてくれた。

1つは、オレの「ありがとう」の虹。もう1つは、再会の約束の虹。

煙突の煙を仰いで空を見たけいちゃんが、涙でいっぱいの目を見開いて、びっくりしている。

けいちゃん、大好きなけいちゃん、オレもう逝くね。

いつか、けいちゃんが虹の橋を渡ってくる日まで、ちょっとだけ、さよなら。

そうして、オレは神様に連れられて、虹の橋を渡った。

このお話は、ほんとうにあったお話。

ある猫と女の子の、とても幸せなお話。

そして、あなたとあなたの愛するものとの、約束のお話――。